

わたしのまちの
いきいきスタッフ
The Vividly Staff in my town

vol. 99

北海道千歳市
マミーズクリニックちとせ

〒066-0038 北海道千歳市信濃2丁目1-13
Tel.0123-27-4103 <http://www.mom-clinic.com/>

「待てるお産は待ってあげよう」が基本方針のマミーズクリニックちとせ。健診のときから一人ひとりの妊婦に時間を掛けて向き合い、妊婦が納得できるお産、満足できるお産ができるよう支援している。



取材日の2日前に生まれた山本隼誠君とお母さんの理沙さんを囲んで（中央が島田茂樹先生）。隼誠君が被っている帽子は同院のオリジナルで、カンガルーケアの際などの保温に用いている。

.....
市民が待ち望んでいた開院

札幌駅からJRで約30分の千歳市。空を見上げれば、新千歳空港に離発着する飛行機を見ることができる同市であるが、マミーズクリニックちとせは静かな住宅地の中にあった。

同院の院長である島田茂樹先生は、もともと大学病院で習慣流産を研究しながら臨床に携わっていたが、研究にもめどが付き、これ

からは自身の力を臨床の場でもっと生かしていこうと考えた。島田先生は「大学病院などで3次医療の一端を担うことも重要ですが、当番制で1人の患者を最後まで見届けることができないやり方では仕事に達成感を感じづらかった」と振り返る。

そんな中、千歳市に休診中の産科クリニックがあるという話を聞き、同市での開業を考えるようになる。調べてみると同市は、陸上・

航空自衛隊の駐屯地がある関係で、若い夫婦が多く住んでおり、北海道で一番平均年齢の若い市であった。年約1,000件の出産があるが、市内で分娩を取り扱っているのは市民病院だけで、その数は年間約400件。残りの600件は近郊の札幌市や苫小牧市にお産の場を求めたり、または里帰り出産を行っていた。こうした状況に同市での産科医院の復活を望む声は大きく、島田先生の開院への気持ち

もだんだん高まっていったという。市が開業支援事業助成金を用意したという話からも期待の大きさが分かる。こうして、2010年4月に同院は開院した。

ベッド数は10床（個室4室、2人部屋3室）で、LDR 1室、陣痛室1室、そのほかモニター室や検査室などがある。待合室には子どもたちのためのプレイコーナーも併設されている。開院後は、2階にあった院長室をLDRに改装したり、温浴用にお風呂を設置し

たりと設備の充実を図った。また、随所にかわいらしい飾りが施され、温かい雰囲気に包まれている。

同院を支えるスタッフは、医師1名、助産師7名（うちパート1名）、看護師2名、看護助手3名、事務員2名である。

…………… 待つお産ができるようになった理由

開院以来、同院で出産した妊婦は465名にのぼる。同院のお産の特徴は、会陰切開の少なさだ。

2011年は279名中、会陰切開を行ったのは2名（0.7%）だけであった。「大学に勤務していたころは、初産婦には100%会陰切開を行っていました。『早く元気な赤ちゃんを見たい』と切開を入れてしまう医師は多いと思います。ある時、分娩カンファレンスで『赤ちゃんも元気でお母さんも頑張れるなら、いくらでも待ってあげたらいいんじゃないですか』と発言したら反論する人はいませんでしたが、チーム医療なので自分は待



① 絵本作家・まえをけいこ。さんプロデュースのプレイルーム。



② マミーズクリニックとせの外観。広めの駐車場は車社会である北海道ならではの。



③ 同院オリジナルのおむつポーチ、臍帯ケース、ベビーマット、トートバック。退院時にプレゼントしている。

④ 奥のスペースに琉球畳が敷かれているLDR。以前は院長室だった所を改装した。ベッドではなく量の上で出産する人がほとんどだという。



⑤ 同院では産後にお祝い膳が提供される。野菜が多めのヘルシーな献立で、パンもおいしいと評判だ。



マミーズクリニックちとせ
院長 島田茂樹先生

北海道大学医学部卒業後、富良野協会病院、旭川厚生病院、釧路赤十字病院、倶知安厚生病院、国立函館病院で研修を積み、米国カリフォルニア州 Scripps 研究所に留学し細胞内シグナル伝達の研究を行う。帰国後、北海道大学産科助教を経て現在に至る。専門は周産期医学、生殖免疫学、免疫学である。

PROFILE

の傷は小さい、ということを実感していた島田先生は、そもそも会陰切開はいらないのではないかと考えていた。「開業してから、助産師さん主導の分娩介助を見せてもらいました。分娩第2期で急がずに待てば、会陰が伸びるので裂傷は起こらないし、いきまないから体力を浪費しないため、お産直後でもお母さん、そして赤ちゃんも元気なんです」と、「待つお産」の良さを話す。

同院が「待てるお産は待ってあげよう」という方針を採ることが可能になったのは、一人ひとりのお産を丁寧に見たいと考えていること、そしてベッド数の関係から

1カ月に29名までの分娩制限を行っているため、お産が同時進行することが少ないからである。

また同院では妊娠36週の健診から臍帯頸部巻絡の有無を超音波で確認している。これは「小児科医が常駐していないので、出生前にできることは全部しておきたい」という師長の佐藤利江子さんからの要望で始まった。島田先生は「臍帯頸部巻絡の有無を確認しておけば、軽度変動一過性徐脈が出現したり、分娩第2期が遷延しても、理由が分かるので、安心して進行を見ることが出来ます」と話す。

島田先生は同院の分娩について「何が何でも『自然分娩』ではありません。まずは安全な分娩、次に経陰分娩、そして自然分娩と、重要な順を決めてお産に取り組んでいます。待つお産が実践できるようになったのは、大学病院勤務時代と考え方が変わったというよりも、待っていれば適切な助産術によって生まれてくることを知り、それを自分の責任のもと完遂できる環境になったからだと思います」と言う。

とうと構えていても、ほかの先生にも同じように求めることは難しかったですね」と島田先生は言う。熟練した助産師が介助すると会陰



同院のスタッフの皆さん（前列左から、川村智晴看護師、原田典子助産師、佐藤利江子師長、島田先生、長岡美帆事務員、嘉屋昭子助産師。後列左から、遠藤ゆかり助産師、齊藤寛子看護師、安倍真由美看護助手、池田裕子助産師、池田朋美看護助手、藤嶋由紀事務員）

Special
Column

.....

ここで生みたいと思われる 場所になりたい

今後の課題と目標について伺ったところ、まず、運動の推奨とその効果について考えていきたいと話す。「妊娠中の運動はよいお産につながるため、どんどん動いてもらい、36週目からはお腹を張らせるための運動をさらに勧めています。切迫早産の方には本当に安静にしてもらう必要があるのかということも考えていきたいです」。

また、産後のアンケートでは経産婦から、「前のお産とは全然違った」と書かれていることが多く、島田先生は妊婦に自分のお産をどういうものにしたいのかをよく考えてほしいと思っている。「家から近いからという理由ではなく、ここでお産がしたいと思ってもらえるようになりたい。うちの分娩方針に納得してもらい、選んでもらいたい」と言う。

島田先生はお産が好きで助産師と一緒に介助しているため、後でお母さんから「お産の最中、気が付いたら先生に足を掛けていました」「先生の手を握ってました」と言われて皆で大笑い

妊婦の持てる力を引き出す助産師の役割

同院の助産師外来は、妊娠16週から受診することができ、エコーが約20分、保健指導が約20分となっている。

同院は4Dエコーを導入しており、助産師外来でも好評であるという。島田先生も「医師による妊婦健診は異常の発見に主眼を置いています。一方、助産師外来では母性を育むこ

とを目的に、4Dエコーを使用することが適しています」と言う。胎児の顔が見たい、手足が見たい、性別も知りたいといった要望が多く、妊婦は健診を楽しみにしている。

また、保健指導の際に心掛けていることとして、佐藤師長は次のように話す。「保健指導では、妊婦さんが胎児を想うことで自身の身体や生活を振り返ったり、お産や育児に気持ちを向け、自ら目標を持って行動できるようにかかわっています。こうしたことがお産の主体が自分であるとの意識につながっていきます」。そのため、助産師外来では、本人およびパートナーが妊娠による心身の変化を受け入れられるように、児への想い、家族のサポート状況、生活スタイル、妊婦の生活などを把握し、不安や戸惑いを緩和するように支援している。その際、一方的な情報提供とならないように、妊婦の思いや考えを自分の言葉で表現してもらうようにしている。また、妊娠中から助産師と信頼関係を築き、自身が描くパースプランの実現に向け、妊産婦の力が最大限発揮できるようにと、助産師は妊産婦と共に歩む姿勢を大切にしているという。池田裕子助産師は、「否定的なことは言わず、母親の自己肯定感を伸ばすことを大切にしています。また、身体を扱う仕事ですので、丁寧に意識しています」と話す。

現在は母親学級、マタニティヨーガ、骨盤ケアの教室を開催しており、今後はベビーマッサージなど産後の教室を充実させたいと言う。同院の助産師のモチベーションの高さが印象的だった。



スタッフ手作りの胎児の成長過程を模した人形。重さも正確に表現されている。中央の人形は、児が羊膜に包まれている様子を再現しており、妊婦への説明に活躍する。

することがあるという。取材を通じて、島田先生の「お産に立ち会ってもその人と一緒に産めるのは

助産師さんなんですよ」という言葉に、同院で助産師として働く魅力を感じた。（取材／編集部）